

ISSN 0910-2396

野鳥たけり

—北海道—

第 77 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会
発行年月日 平成元年 9 月 21 日



ハイタカ 1989. 6 撮影者 佐々木武巳

私の探鳥地 ⑫

千歳市街地 遠藤 茂

私の住居より、車で20分～30分のところに、支笏湖野鳥の森・ウトナイ湖・恵庭公園・北大苫小牧演習林・広島町レクリエーションの森・長都原野・千歳市ふ化場等多くの探鳥地があるが、常に出かけるのは、5分ほどいける千歳市青葉公園を中心とした、千歳市の中央を流れる千歳川岸である。

下流は、千歳市立第二小学校から上流はサンポート・ガーデンまでが、私のホームグラウンドである。

青葉公園は、近年野球場・テニスコート・陸上競技場・キャンプ場等ができ、野鳥の生息地としては必ずしも好適な場所ではないが、まだ樹木も多く大木も残っており、特に千歳神社の宮司さんが愛鳥家で境内にバードテーブルを設置されており、多くの野鳥たちの憩いの場として活用されている。

神社境内には、アカゲラ・コゲラ・シジュウカラ・ハシブトガラ・ヤマガラ・ゴジュウカラ・エナガ・シメ・キクイタダキ等一年中観察できる。

時々エゾリスとキタキツネが、子を連れてあらわれ、私たちを観察している。

神社の境内を通過して、公民館の裏から、千歳川を右手眼下に見ながら進むと、クロツグミ・トラツグミ・ヒヨドリ・アカハラ・コムドリ・ヤブサメ・カワヒラハワ・キビタキ・オオルリも多く見かけるようになる。

更に進めば、春の渡りの時期にノビタキ・エゾビタキを見ることもある。

奥に進んで高速道路近辺には、ウグイスやメジロ・イカル・キジバト・エゾライチョウ・アオジがよく現れる。

森の奥からは、カッコウ・ツツドリ・アオバトの声が聞こえて来る。また夜にはアオバズクの声も聞くことができるのはこの辺である。

夕方にかけてカラスの大群を観察するには、図書館の裏が一番である。

晩秋から冬にかけて、ほぼ同じコースを歩けば、キレンジャク・ヒレンジャク・ツグミ・アトリ・ヤマゲラ・オオアカゲラ・カケスを観察でき、時には、ミヤマホオジロ・マヒワ・ウソを見ることが出来る。

第二小学校よりインディアン水車周辺までの千歳川には、オオハクチョウ・キンクロハジロ・ホオジロガモ等の水鳥を時々見かける。又この近くにある交通公園内ではコウライキジが歩いている

のを観察することがある。

千歳川の鉄橋をこえて市の中心である市役所裏に至るとイワツバメを見ることが出来る。時にはミンクが土管から顔を出して、飛行して来るジェット機をうろさそうに眺めている。

11月下旬からは、ナナカマドやオンコの樹が多いので日中でもツグミ・ヒレンジャク・キレンジャク・ヒヨドリを観察して、レストランで昼食をして帰宅する事が多くなる。

市役所より上流の神社周辺及びサンポート・ガーデンにかけては、キセキレイ・カワセミ、それから千歳市の鳥であるヤマセミにお目にかかる。

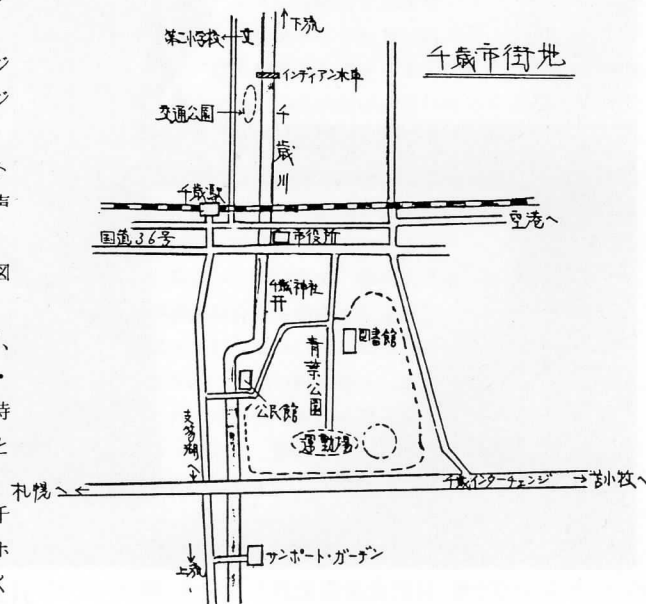
またカワガラスがあらわれて、水中にもぐのを見ることが出来る。

コガモ・マガモがのんびりと川のよどみで、遊んでいるのもこの辺である。

秋には、インディアン水車で一度捕獲したサケを力強い良い卵を取るためふ化場まで、そ上させるために放流したサケを観察できるのも、こま辺が一番良いところである。

運がよければアカショウビンを、冬には、オジロワシ・オオワシも出現するので観察できる。

千歳市若草2丁目18～5



追悼

犬飼哲夫先生

野村 梧郎

犬飼先生が亡くなりました。最近では東京で療養生活を送られていて、北海道におらなかったためお目にかかる機会をつくれなかったのが残念でなにか大きな穴があいたような気持ちになり、偉大だった先生の存在をあらためて思いなおしている。

先生とお知り合いになれたのは20年ほどまえ、昭和44年からのことでその後ほとんど間をかず、野鳥愛護会をつくるはこびになっている。このため、犬飼先生と野鳥愛護会は私の人生において完全に併行し重なりあった存在になった。

今から20年前、野鳥愛護会が発足したころは環境庁が設置される直前で、北海道では自然保護条例制定作業が具体化しはじめていた。いま思い直してみると当時は、野生動物にたいする社会の新しい認識が生まれ始めているときだったと言える。

この時代を背景にして誕生した野鳥愛護会だったが、リーダーになる人には新しい野鳥保護の流れを的確にとらえ会を導いていく力を望まれた。また、人々の気持ちをひとつにまとめるため昔からのいきさつにくわしい人をも考えられていた。

犬飼先生はこの条件にびったりで、そのうえ長年つちかわれた人脈は豊かで先生を尊敬している人も多い。

犬飼先生に、野鳥愛護会の初代会長をお願いするときこのようなことが考えられたのだが、当時すでに先生は北大を退職しておられはしたが、とにかくお忙しい方だった。公的機関の審議会や委員会それに調査の依頼など、先生の学識経験を頼られることが多く暇の無い毎日を過しておられた。

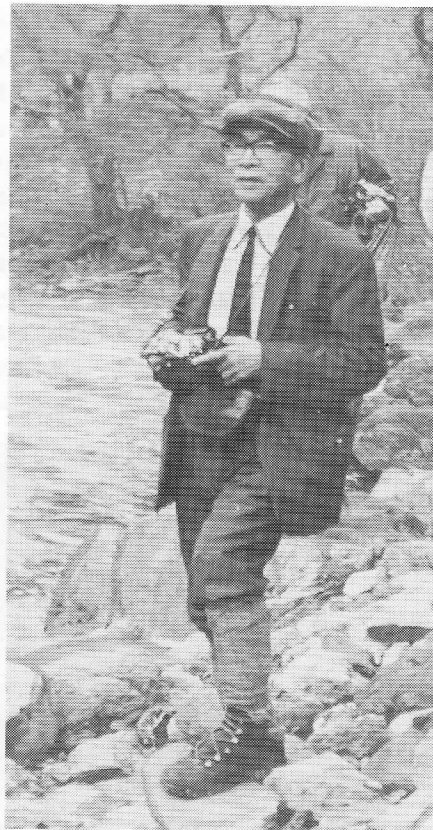
この忙しい先生が、野鳥愛護会の会長を引き受けて下さった。西に向うか東に行くのかさえはっきりしない本会が、いまの姿になるのを先生は見直されていたのかも知れないと最近では思うようになっているが。当時は、よちよち歩きを始めようとする別の団体の会長を、先生はどの方がよく引き受けて下さったと思ったものだった。

野鳥愛護会発足後の先生は、温厚な人柄と豊富な知見でわれわれをリードされ、会の基礎を作って下さった。

生前の先生のご厚情をしのびながら。

先生が愛されてやまなかった北海道の自然と動物を守るため、会の充実と発展に尽すことをあらためて先生のみ霊にお誓いし、追悼の言葉にさせていただきます。

西区西野7条1丁目



存り日の犬飼哲夫先生

北海道に舞い降りた迷鳥たち (2)

山田良造

人々の無関心が鳥たちを減ぼすと言われます。厳しい環境に適応できず、自然に減んでいった鳥たちもいます。1959年頃までは日本で繁殖していたコウノトリは、今は渡来すると迷鳥扱いでテレビ・新聞に報道されます。

こうした絶滅に瀕している鳥、日本に渡来した迷鳥等を、日本鳥学会未公認記録を含めて、野鳥の会会員等道民の記録を掘り起し、記録化したいと思います。今回は幌延町の富士元寿彦氏、苫小牧市の大畑孝二氏、札幌市の島田明英氏、室蘭市の本多進氏の記録を紹介します。なお番号は前号から続いています。

4. シロオオタカ (ワシタカ科)

1979年11月24日、幌延町サロベツ原野下エベコロベツ川とベンケ沼合流点付近は、川の流れて僅かに川面が開いて、水鳥たちの休息地になっていた。この水鳥を狙って飛来したオオタカに似た鳥を富士元氏が観察した。富士元氏はこの鳥が日本初記録のシロオオタカとわかり、12月2日まで9日間ベンケ沼周辺でこの鳥を観察した。

シロオオタカはオオタカの亜種で、全体汚白色で、褐色の斑紋がある。東北シベリアからカムチャッカ半島で繁殖する。日本ではこの記録の他に1981年2月10日、大樹町日方農業西川沼一方牛舎で、こぼれた飼料に群れるスズメを追ってシロオオタカが入り込み、保護された。



シロオオタカ

1986年11月18日、網走市八坂市営ゴミ処理場に設置されていた箱罠に、シロオオタカが入っているのを市職員が発見保護し、その後測定(全長59cm・体重1.55kg)のうえ、足に標識をつけ11月23日に放鳥された3例がある。



アネハヅル

5. アネハヅル (ツル科)

1986年10月25日、苫小牧市植苗ウトナイ湖トキサラマップ川河口付近で、ヒシクイの群れに交じってたたずんでいるアネハヅルを、日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアレンジャー大畑孝二氏等が観察した。アネハヅルはウトナイ湖が凍結した11月26日まで記録された。

アネハヅルは全長97.5cmの小形のツルで、額から頭上は灰色、目の上、目先、のど、前頸は黒く、目の後には白いふさ状の飾り羽がある。嘴は細く短く橙色、足は黒色である。

中央アジア・中国北部・モンゴル等で繁殖し、冬はアフリカ東部・イラン・インド等に渡る。日本にはまれに渡来し、鹿児島県出水市にはツルに混って渡来し、最近では1989年茨城県に渡来した。

北海道には1974年札幌市真駒内と釧路。1973年5月27日から6月3日まで稚内市富磯、1976年7月札幌市月寒種羊場、1982年5月31日別海町西春別に渡来記録がある。

6. クロジョウビタキ (ヒタキ科)

1986年4月25日正午頃、斜里町知床半島の突端近くの文吉岩崖地で、崖地に生えた灌木の枝に止っているクロジョウビタキを、島田明英氏等が観察した。

クロジョウビタキは全長14cm・頭から背、胸、翼の上面が黒色、腹から下尾筒、腰が赤褐色、尾も赤褐色で中央羽は黒っぽい。

ヨーロッパから中央アジアにかけて分布し、崖や岩のある場所に生息しビルのある市街地でも見られる。習性はジョウビタキに似ている。

日本には1985年4月、山口県見島で記録された迷鳥である。



クロジョウビタキ

7. ゴマフスズメ (ホオジロ科)

1985年1月、室蘭市本輪西町3-18和泉勝年方バードテーブルに、クロジに似た見慣れない鳥が飛来し、和泉さんの知らせで、日本野鳥の会室蘭支部会員がこの鳥を観察し、ゴマフスズメと確認された。本多進氏等の観察によると、ゴマフスズメは餌をさがすとき、両足を揃えて長めの爪で、落葉等を前に蹴りあげる動作をすることがわかった。この鳥は3月中旬まで室蘭で冬を過ごした。



ゴマフスズメ

ゴマフスズメは全長17cm、ホオジロより大きい。額から尾羽まで体の上面は黒褐色、腰から尾はやや赤褐色、のどから下尾筒までは白くて、のど・胸・脇には黒褐色の縦斑がある。嘴は黒褐色、足は褐色である。

北アメリカ大陸西北部から中部にかけて分布し、冬は南に移動する。日本には1935年10月、栃木県日光で記録された迷鳥。

<参考文献>

日本産鳥類図鑑(東海大学出版会)、鳥630図鑑(日本鳥類保護連盟)、北海道の野鳥(北海道新聞社編)、北海道新聞報道記事(1980年以降)等参照。

※なお、前号(76号)でニシコクマルガラスをニシコクマルガラスと記したことを訂正します。

〒003 札幌市白石区栄通16丁目4-13

写真説明

シロオオタカ

1979. 11. 24 サロベツ 富士元寿彦撮影

アネハヅル

1986. 11. 6 ウトナイ 山田良造撮影

クロジョウビタキ

1986. 4. 25 知床岬 島田明英撮影

ゴマフスズメ

1985. 2 室蘭市 本多進撮影

ぶらり 上高地 だより

高梨敏子

7月21日、ミーチャン・ハーチャンとして上高地へ。それでも双眼鏡はある。上高地温泉ホテルの露天風呂につきながら、野鳥のさえずりが聞けたら最高などと思いつつ、ヌクヌクなにしろ観光なんだから。と3時間コースを歩きはじめる。気持ちは観光なのに、目も耳も探鳥してる。足もほとんど進まない。キジバトがやたらと目

立ち、ウグイスの密度も高い。アマツバメが飛び、キビタキがベランメー調子でさえずる。ツミの幼鳥が足もとから突然飛びたち親が前にきて目をひいた。子の安全を確認すると飛び去った。コサメビタキの巣立ちした幼鳥が親にエサをねだっている。観光にはなかなか充実している。ほんとうにいい空気とすばらしい風景。

お昼はこの空気を主食に、パンを食べ、観光の目的の一つ、ミーチャン・ハーチャンとしては、宿泊は一年前の予約が必要な上高地帝国ホテルの喫茶へと、いそいそと足を運ぶ。紅茶520円、スイスケーキ520円であるが、小ぶりですっきりとしたケーキは、私を満足させるには十分である。今回の目的を果たして帰路についた。

……と、終わるはずなのだが、ただ探鳥を楽しむだけでなく、帰りのバスからの風景が変化していき、上高地のその場所だけは俗化されてると聞いていてもすばらしかった。その下の方の川はどうしてこんなに濁った色をしているのかと思う。そして、ダムがあり、そこから先の川は水の流れのあるはずのところ、ところどころに水溜りがあるだけ。『ひどい』と思いが

らながめ、さらに下ると別の川との合流で、そこからは水の流れのある川になっている。良いと皆に思われる場所だけが残され、他はメチャクチャにひどいもので、細切れの自然がある。地球の一員である人間が自滅への道を歩いている。鳥をただ見るだけの人が鳥を通じてこんな風景が目に入るようになってしまい、かなしいばかりです。

……などと、突然、投稿気分になり、目立たない存在の私としては、有名な地名をバックにアピールをすることにしました。

〒240 横浜市保土ヶ谷区保土谷町3-203.

ルセアン元町402

ニセコ自然日記より

宗澤 美佐子

事始め

1982. 5. 27

1980年、此の地に家を新築中ウグイスとカッコウの鳴き声をさり気なく耳にし、キタキツネを折りに触れて見て来た。その前年はシマリスも見ただけで自然破壊をした我が家の周辺ではついぞ見かけることがないまま今日に至っている。

新しい家に到着して、アカゲラを唐松の木に見つけ赤白黒のその美しさに目を見張り、図鑑に依って鳥の名を認めたときの感動を今も忘れることはない。大袈裟な表現をすれば、不信心の私がその後「神様は存在する」と真面目に考えていることでも判ろうと云うものである。

その後、アカゲラが我が家の軒を突いて角々に穴を開けたのにはほとほと参ってしまった。大工さん曰く「ラワン材だったら斯うはならなかったと思う。松材だからだなあ。撃つ訳にもいかないし、仕方がないなあ。アハハハハハハ」……。

つけ加えると、大小3ヶ所空けられたこの穴は後年、その中の2ヶ所がムクドリの子育てに利用され、雛のざわめきを壁越しに聞かせてくれたのだった。

ムクドリ (No.1)

1982. 5. 27

Hさんから頂いた巣箱を並べて取り付けたのが3月始め、末になってムクドリが姿を見せ、どちらにしようかなあ！と云う様子で双方の見比べをしていた。やや時の経過があり、どうやら落ち着いたと思われたのが4月に入ってから。しかし、当初は初めてのことであり其処に巣作りを始めていたことを確認したのは5月に入ってから

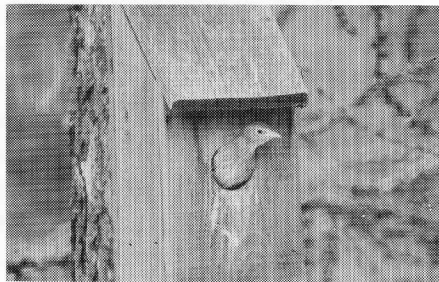
だった。

番の動きが頻繁になりヒナ鳥が孵ったことが判った5月も末近くなると、親鳥は巣箱の中に入上半身を入れた逆さスタイルで給餌をし、ときに身を洗って、白い大きなヒナ鳥の糞を啣えては持ち出すのである。

コムクドリ (No.1)

ムクドリより遅れること実に1ヶ月半餘コムクドリ飛来。最初、頬の赤い斑点をみてひょっとしてホオアカという鳥がいるのではないかと考え調べたところ、その通りの呼び名の鳥がいた。しかし、それはホオジロの間で見当違いだった。コムクドリの♂と判明した訳である。Tは不細工な鳥だと云い、私はその仕種をも含めてアロハのお兄さんと呼ぶ。ムクドリが選外とした左側の高い巣箱がどうやら気に入った様子、と思ふ間もなく、いきなり到着日から巣作りと覚しき行動開始である。

巣箱直下にある枯れススキを運ぶ様子は実に元気よく、♂と♀の連携プレーも見事で見飽きることはない。



ムクドリ (No.2) 1982. 5. 28

ムクドリがけたたましい。カラスが巣箱を襲ったのである。窓を開け、大声を出して追い払う。その後の親鳥は実に慎重になった。ストレートに巣箱に飛び込むことをせず、離れている唐松の枝に一度羽を休め、段階的に近づき、尚、きょろきょろと警戒をしながらと云う次第。にっくきカラス、どうしてくれよう。

ヒナの鳴き声を聞く。耳を澄ますと、ヒナ鳥の気配が察知出来る。給餌のときの賑やかなこと。親に似て、決してよい声とは思えないけれど、見えないヒナ達の愛らしさを思う。"巣立ちが見たい、"

早月雑感 1982. 5. 末

昨年、幾度となく姿を見せて野鳥への関心を誘発してくれたアカゲラを1月に見たきりなのが少し淋しいけれど、3月末ムクドリが飛来したことで始まった私の観察熱は徐々に徐々に高まる。

たどたどしくも、それと確認したものを列挙すると
1月=アカゲラ 3月=ムクドリ 4月=未確認 5月=コムクドリ・ハクセキレイ・ホオジロ・カワラヒワ・シジュウカラ・アオジ・ツグミ・ウグイス・カッコウ・キツバト・ベニマシコ・ツバメ・ヒバリ・オオジシギ・コゲラ・イカル・キバシリ・ヒガラ・カケス・ミヤマホオジロ・ミヤマカケス・マヒワ・アカハラ・キセキレイ・モズと27種を数えることが出来ていた。

ムクドリ (No.3) 1982. 6. 5

給餌回数を追う。

9時30分~10時・7回、10時~11時30分・8回となり1時間に14~15回とし、朝4時過ぎには姿を見ているので、一応給餌開始時間とし、夕方は仮に19時とすれば、210~225と云う数字が出て来る。驚いた。単純な計算なので、当を得ているとも思えないが、かなり近い数字が出ていないかとも思っているのである。

給餌の様子

当初は、親鳥がその尾の先の上面を巣箱入口上部にびったりつける姿勢で首を深く差し込んでいたのが、ヒナ鳥の成長に伴い段々に尾の位置が下って来た。此の頃は首を入れるや、ヒナ鳥の声は一段と高く、騒がしさも増している。

ムクドリ3態

(その1) ♀、給餌の後、傍の枝に止まってしばし休憩、再度、巣箱に入って中でしばし。♂が来ると、ひよいと交替、その後、一緒に飛んで行った。

(その2) ♀、折角持参した餌(ミズらしい)を枝に止まってから落とし、追うように降りたのに探し出せず、下方の枝にしょんぼり。♂の来るのを待っていたかのよ

うと一緒に飛んで行った。

(その3) ♂、餌を啣えたまま隣りの木の枝で幾度も鳴く。鳴きながら、だんだん巣箱に近づいて用を済ませた。餌が落ちるのではないかとばらはらさせられた。

(注) 今日、気付いたこと。♂♀の判別はつきにくいのが胸一杯黒いものと、首の周りだけ黒いものがあるので、前者を♂、後者を♀と考えることとして、その判断から性別記入を試みた。

ムクドリ (No.4) 1982. 6. 6 晴

ヒナ鳥が飛びつくのか、親鳥は首をちょっと下へ向けただけで給餌をしている。犠牲になっているのは、どんな昆虫なのか。啣えられているものは、かなり大きいものようである。例えば熊ん蜂かもしれない。透き通った羽、濃い赤茶色で蛇腹に見える大きな胴体。双眼鏡で見ているため、と云うこともあるかもしれない。

ヒナ鳥の嘴が一瞬見えた。親鳥が去った直後、白っぽい三角の嘴が覗いたのは巣立ちの近いことを暗示しているのではないだろうか。加えて、親鳥の態度も少し変わって来た。餌を与えるのに焦らしてみたり、巣箱の近くで長い時間、懸命に鳴き続けたりしている。

ムクドリ (No.5) 1982. 6. 9 晴

糞の搬出回数が殖えている。

ヒナ鳥の嘴を見たのが6日、昨日はその動きを見ていないが、巣立ちの間近い感じがして、おちおちして居られず4時起床。4時10分、♂が姿を見せる。巣に直行することをせず右隣の木の梢のてっぺんに羽を休め、次に左隣の木の枝に降りて、長いこと鳴き続けた。

給餌間隔はちょっと長い感じ、やはり寝起きは幾分鈍いとなると、先日調べた時間帯は一日の中で最も頻繁なときだったのかもしれない。

昼食時、羽ばたく気配とか、親鳥が入って出て来ないとか、巣箱の異常に気付き着着かなくなったので、固定してある望遠鏡を覗く。

ヒナ鳥が上半身を乗り出して今にも飛び立たんばかり、産毛を風に靡かせて白っぽい下面を見せている。感激の一瞬である。絵で見ると同じように、口をそれ以上は開かない程に大きくあけて餌をねだる。その元気のよいこと、親鳥はたじたじの態である。再々、顔を出したり羽ばたいたり、動きが見て取れるようになった。

ムクドリ (No.6) 1982. 6. 10 晴

身を乗り出すヒナムクドリ。今にも飛び立ちそうな姿勢を見せる。もう、気が気じゃなくて何事も手につかない。すっかり成長して親鳥と同じ位の大きさになったヒナ鳥だが、冠羽は未だ柔らかそうで短かいのか、つっ立っ

ていて凶鑑のヒバリのよう。

何羽かな?の課題

色の薄いのがかりが覗いていたように思っていたが、はっきり色分けの出来る濃いのと2羽は確実にいることが判った。体の大きさから考えて2羽以上は無理ではないかと思う。(注)後年3羽を確認、5個の卵を確認=身を乗り出して上手に口移しに餌をもらうクロちゃん、下手して落してしまったシロちゃん(親鳥が下手をしたのかもしれない、とも思う)
ヒナ鳥に命名、クロちゃん、シロちゃん

ムクドリ (No.7) 1982. 6. 11 晴

今朝も親鳥は4時過ぎに姿を見せる。ヒナ鳥は手馴れて餌を待ち、親子揃ってぱたぱたと賑やかな給餌風景である。

ヒナ鳥が鳴いた。一人前のこの鳴き声、今までは聞いていない。嘴の動きと親鳥の鳴き声と一致する。成長したヒナ鳥は、おはよう!と大きな声で挨拶をしても知らん顔、カラスが近づいたので大声を出し窓を叩いても全く動じない。

ああ、巣立ちはいつ?。その瞬間を見たくて、毎朝頑張って早起きをして来たけれど、私は、今日出掛けなければならない。残念。

ムクドリ始末記 1982. 7. 16

3月末、飛来。4月、巣作り確認。5月になってからやっと動きに注目出来るようになる。

6月6日、ヒナ鳥の嘴を認める。

6月9日、ヒナ鳥が身を乗り出す。

6月10日、色の具合で、ヒナ鳥は2羽とする。

6月11日、ヒナ鳥が鳴いた、親鳥のように。外へ身を乗り出して餌をもらうようになり、じっと空を見上げ、辺りをみる。それぞれに、かなりの時間をかけてみる。

6月16日、帰宅。ムクドリは巣立っていた。12日から15日までの間である。それにしても、暗くぼっかりと空いた巣箱の丸い穴。塞がることないのは如何にも淋しい。あんなに親しんだムクドリ達よ。今頃は、何処に、どんな風になっているのだろう。

コムクドリ (No.2) 1982. 6. 21

5月18日、その飛来について記入したのみで、専らムクドリの観察に終始して居たが、今日(夕方)コムクドリにヒナが孵って、子育ても、ムクドリの経験から佳境に入っていることに気付く。♂♀が続けて白い糞を啣えて出るところを目撃したのである。

先日末、餌を啣えて枝先にいる親鳥を見ているのだけ

れど、巣箱が高いためもあって(体の小さいこと、葉が繁って来たことも書き加えなければならないかもしれない)ムクドリの時より、非常に観察がしにくい。そのために判然とさせられなかった。

コムクドリのヒナ鳥の巣立ちを見ることは容易ではないと考えられるが努力をしてみたい。

コムクドリ (No.3) 1982. 6. 30

餌を与えるのに親鳥が巣箱の中へすっぽりと入らなくなった。ヒナ鳥が大きく成長をした証拠である。それに親鳥が巣箱の中へ顔を向けて幾度も鳴いている。巣立ち訓練のひとつかもしれない。

7月3日~8日の間、家を空けるので、ムクドリの時と同様、巣立ちを見るのが叶わないことが考えられる。"どうぞ〇〇様の心境である。

コムクドリ (No.4) 1982. 7. 2

懸念していたように、ヒナ鳥が顔を出した。巣立ちに立合える可能性は殆んど無くなった。

それにしても可愛い。早速、身を乗り出す姿勢で餌を受けている。今のところ1羽しか見ていないようだ。黄色い嘴、丸い頭、まん丸で真黒の目、背のあたりは黒い色に見える。頬の赤い斑がヒナ鳥の中から判然としているものなら、あのヒナ鳥にはそれがないので♀と云うことになる。

コムクドリ (No.5) 1982. 7. 9

ああ、コムクドリよ、お前もか。

ヒナ鳥が顔を出したのが2日、出発前日で帰着が8日夜、コムクドリも又、帰りを待って居てはくれなかった。8日の朝だったのかな、7日かな、6日かも。何と未練がましいことだろう。

判っていて、今朝は4時前に起きたが、コムクドリの影さえ見とがめることも出来なかった。どう嘆いたって許されると思う私である。家主に挨拶もしないでさようならなんて、余りに薄情ではありませんか。でも、どうぞ元気だね。



コゲラ 1982. 7. 12

北海道では珍しい猛暑の続く7月上旬、雨も降らず、雨ごいの話題が聞かれる程である。雨の予報が裏切られたこの日、少しばかり風が吹いて少しばかり涼気を感じた朝6時、コゲラを見る。

唐松にスズメ位の鳥が取りつき、背を見せてどンドン上る。地味ながら、はっきりとした横縞羽。Tを呼び調べてもらい、それと確認する。

双眼鏡を手離さない中に、道の向う側の唐松林にアカゲラがすいーっと。すいーっとシジュウカラがお出ましになる。ついでながら草取りのため裏庭へ出た私の気配に大石の陰から飛び立ったのはキジバトだった。それで思い出したことがある。

昨日の夕方、撒水のため動き回っていたとき、背高く伸びたイタドリの下にキツネがいてこちらを窺っていたらしいことに気付いた。親しい友人に逢った気分か思わず「あら」と声を出すと、あちらさん、少しも慌てず冷水川の方へ悠々と去って行った。想えば、移住当初、家の前を歩いているキツネを見つけて姿を目で追ったとき、あちらさんも負けずこちらを見ていて、視界からその姿が消えた後で、はて、私はキツネを見ていたのかな、見られていたのかなと考えたことがあった。

イカル 1982. 7. 23

夕方、洗った覆物を始末するべく外へ出たところ、キョッ、キョッと鳴きながら少し離れている唐松のてっぺんに止った大きめの鳥を見つけて興奮する。急いで双眼鏡を取りに家に入ったが割合ゆっくりしてくれたので雨模様のかすんだ視界ながら一生懸命みる事が出来た。

頭の黒いのがはっきり、しかも短かく切れている。それに羽の部分が黒く（明かい陽射しの中では紺色に見えたのだろうか、本ではそうなっている部分である）嘴は大きく黄色い感じで、残りは灰色であると判断をした。久しぶりに新種発見である。うれしい。

ヒガラ 1982. 7. 30

旭川からの親しい友人達の去った翌朝、いつもの、さんざめく野鳥の声を耳にして屋上へ駆け上る。

唐松林に群れる小鳥、飛び交う小鳥、動きが素早いのでなかなか姿を捕えられない。辛抱強く待つことしばし、喉の黒い線、あ、あれはシジュウカラ。思う間もなく双眼鏡が次のを捕える。と、その中に更に小さい地味な鳥がと仲間入り、はてと、眼を凝らす。車が通ったために散ってしまう結果となる。

スズメ位と云うシジュウカラに対して、スズメより小さいと云うハシブトガラ・コガラ・ヒガラ、どうも冠羽の具合まで見られなかったけれど、その色の具合から、

ヒガラと思うのが一番自然なようなのでヒガラとした。

シジュウカラ 1982. 8. 2

お馴染みの鳥の管なのに、背面から眺めることで、改めてはっとさせられた。色が地味なので、カワラヒワの背面を見たとき程の驚きはなかったが、考えてみれば、羽の色模様を相対的に眺めることで美しさが倍増されると見てよいのだから新鮮な訳である。

それに、電線を横跳びにつつつと進み腰を振るように向きを変えたりするときの愛らしさ、ありふれていて魅力的な鳥ではある。腹部が白っぽいと黄色っぽいのが並んでいたの、何を意味するのかと調べたが手許の資料では判らなかつた。それと翼の1本の白線がよく目立つことが確認出来た。

キバシリ 1982. 8. 2

電線を伝い歩き、電柱を上下して仲よく遊んでいた2羽のシジュウカラが林に戻ったところで、私も双眼鏡を戻す。林の中はささやき合う小鳥達でざわめいている。大型自動車が奇妙な音を立てて通り過ぎた。一瞬、林は静寂となる。1羽の鳥さえもないみたいである。

枝先につと出て来た鳥、シジュウカラじゃない、真黒で丸い目が可愛い。頭から腹にかけて白い。嘴を思い出そうとしても駄目、薄い色だったのだから。兎に角、嘴を動かして、じいっ、じいっとううように鳴いた。鳴き声の表現はとてむずかしい。忘れそうでくやしい。

一度、静かになった外が、またまたさんざめく。ペンを掴き屋上へ飛び出す。いるいる群れている。シジュウカラの群の中に幾種類の鳥が一緒にいるのだろうか。

全体が薄い茶色の優しいのがいた。そしてその鳥、目の前の木にひよいと来たが背中が細かい市松模様でカラ類とは違う体型。つつ、つつと木を登って行く、見えなくなる、また見える（後で判明、螺旋状に登るのはこの鳥の特徴でした）目を見張る。まるで、唐松の木肌と同じような色の鳥の名はキバシリと云う。成程。

ああ、また新種を見た。その上、その群の中でウグイスが喉元を紅潮（そう見えた）させて、私のために、私の方を向いて鳴いてくれた。私はそう思うことにする。

それは華麗な小鳥達の舞台だった。

随想 1982. 8.

水を得た魚のように、と云う表現がある。雨を得た小鳥のように、と云う訳にはいかないのだろうか。

今朝は雨がぼつぼつ落ちていて、私は例の帽子をかぶっていた。雨催の日とか、小雨の日（本降りの日の様子は不明）は野鳥がよく囀り、よく遊ぶと思っている。

ある鳥を間違いなく見ていると思うのに自信がない。

53才と云う年令のために？衰えた視力が情ない。眼鏡をかけると、双眼鏡はこれ又びったりしないのである。でも再度、眼鏡越しの訓練を試みようかな。

この地へ来て、体調は快復している。余生のスタートラインに居る私にとっては幸甚の至りである。生活環境の整備をして、2、3年可能な限りいろいろなことに挑戦し、体力の衰退に合わせて、順次、友として行けるものを模索しよう。

鳥の名は？ 1982. 8. 16

14日、丹念に見た鳥なのに、どうしても決定出来ない鳥名。全体が茶色で地味ながら黒く丸い可愛い目をしていて尾の先が僅かに白い。シマセンニューと見たい。
"北海道の鳥"、"旺文社図鑑"ともに、もう少し詳しい生態説明が欲しいと思う。比較的低いところを飛び交い主に地上で虫を捕えている様子。

16日、もう一度見たいものと屋上で待機したが駄目。晴れ上り（日中、雲が多くなった）さぞや暑くなると思われた朝で、鳥影なく、しばらくしてホオジロがちよっと挨拶をしてくれた。次にスズメが現れ、小さい白い蛾（と思う）を立て続けに捕るところを見る。初めのは胴だけ食べて羽はわざと落していたようだ。

当初の期待は外れたけれど不足はない。第一楽しい。

更に、少し濁った声で短かく鳴き続ける鳥がいる。例えば"グエッグエッグエッ、それとも"ゲッゲッ、"クエックエッ"の主を追っているがとんと判らない。どうも、空を飛んでいる中型の鳥ではないかとも思うが判らない。その中、きっと確かめたい。

アカゲラの声 1982. 9. 12

長い留守で、砂利の整理、草取り、ニワセキショウの種子蒔きと忙しい。一段落の8時過ぎ、小鳥達のざわめきが始まった。急いで家へ駆け込み手を洗い屋上へ。

何やらいろいろという。曇天のため、なかなか姿をつかめない。アカゲラ！後頭部と下腹部の赤いよ。"キェッ、キェッ、鋭い声を発しながら木をよじ登る。さーっと裏山へ飛び去ったと思ったが、また同じ声が聞こえる。さあ、頼りない私の記憶力、次の機会に声だけでアカゲラと判別出来るだろうか、たった今は自信があるのだけれど。近くのロッジの奥さんがお嬢さんを背負って通りかかり、屋上へ。アカゲラを見るのは初めての由。

キセキレイの巣を襲った青大将がヒナ鳥を飲み込んだ話を聞いて、ムクドリも巣箱を襲ったカラスのことを想い出した。家へ入ったら10時半だった。

この日記から7年を経ている今も、野鳥の声で識別出来るのは極めて少数に限られていますが、当時は、鳴き声で野鳥名を当てることなど信じられない気持ちでした。

モズ 1982. 9. 23

朝9時、ジェッ、ジェッ、ジェッ、ジェッ強い声、巣箱のかかった木のとっぺんから離れた木のとっぺんへ、そして向いの深い木立の中へ聲を落して消え去った。2羽が行動を共にしていた。

チャンスはあったのに、確認に至らなかった。1)スズメより少し大きいかな 2)尾が長くスマートだと思った 3)セキレイではない 4)腹部が白っぽかった 5)嘴の様子不明。モズかな？

同じ時、大きな白っぽい鳥が少くとも4羽、立て続けにニセコアンスプリの方向から裏山へ抜けた。最初の鳥は目前を横切って比較的近い木に止ったけれど、赤味を帯びた色を持っていたことが判っただけ。溜息をついている中に、次から次へと飛び抜けて行ってしまった。

カケス（その1） 1982. 10. 4

秋晴れの午後、カワガラスの棲むと云う沼を見たくてT氏宅訪問、御夫妻の先導で目的の場所へ向う。

藪を進む途中、前方の木に大きめの鳥影を認める。カケスだね、事もなげに言い放つT氏。双眼鏡で見たのに遠過ぎてとんと様子の掴めない私。無念。

浅い藪は続く。幾段にもなった小さな滝を左右に見ながら目的地へ。沼には細く白く背の低い枯木が引き締った雰囲気醸して立っている。カワガラスに対面は叶わなかったがどんぐりを拾い、赤い葡萄の葉を貰って秋に親しんだ。ふと、若い笹の葉が一面にあることに気付き念願のお茶を作るためこれを摘む

カケス（その2） 1982. 11. 16

ニセコよ、ただ今。

大好きなこの自然は少し疲れた私を優しく迎えてくれて期待を裏切らない。見馴れた山々よ木々よ小鳥達よ。

懐しい風景に見とれている窓の下に沢山の小鳥が戯れている。この表現に誇張はない。12日のことだった。感激して独り騒いで居たくせに、旅の後始末で忙しく記帳を忘れていたが、ホオジロ、アオジがいて、それに冠羽のあるのがいたのだ。黄色の部分をもつこの鳥、ミヤマホオジロか、窓の下に幾羽もいたのだった。

そして今日、とうとうミヤマカケスを見たのである。

高熱のため脱力感のある私は、飯寿司漬けのために体調を戻すため無理をして起きていた。寝巻姿のまま、外を眺めていると、白っぽい（と思った）鳥が飛んで来て殆んど葉のない木に動きを止めた。じっと動かない鳥はとらえにくい。動き出したが、ここと思えば又あちら式に動いていて又静止。何故かモズではないかと思った。

やがて、ぎこちない格好で動き出した鳥は大変に鮮やかな配列の色をした鳥であることが判り胸が高鳴った。



植苗探鳥

1. 6. 11 三船幸子

リラ冷えが続くなか久々の快晴に恵まれた。絶好の探鳥日和。植苗。それは

は駅を背に真直な道から始まった。

両側に雑木林が続く、まもなくキビタキが奏でる甘くつやのある序奏を耳にして、初参加の不安も和らぐ。

昨年の今頃、北海道新聞に格好の探鳥ガイドと銘打った道野鳥愛護会の記録集発行が記載されていた。丁度その頃、札幌西区民センター主催のバードウォッチングをきっかけに3年が経過し、鳥に興味をもちはじめ鳥と名のつく書物を随分あさっていた時期故に、早速そのガイドブックも入手した。ガイドブックは7つの地域にまとめられていた、そのうち2つの地域を残してその年の私の探鳥は終わった。

さて年明けてシーズン到来。未探索「植苗」に早期降り立つ。道に関する前知識がなく、ガイドブックの再読を頼りに霧の中を歩く。左手林を抜け開けた所に出る。そこは美々川の左岸だった。西に行き過ぎらしい。美々川がウトナイ湖に注ぐ辺りが探鳥地とブックには書いてある。同じ道に戻るのが惜しく、川口までの距離を高を括って河岸を歩きだす。長ぐつを用意はあったがオーバーズボンを持たない悲しさ素人判断が祟り、着衣が朝露にぬれてしまった。あまりの寒さに目的のシマアオジを観る余裕を無くしてしまい、車へ引き返し帰った。

後日。6月11日御地でガイドブック本家の探鳥の催しを小耳にはさみ、再訪をきめた。

上記の経緯があったが元に戻り、駅前通りのキビタキに続きアオジやカラ類、カッコウの囀りを聞き左側2本目の道を林に入った。入って最初の小径を左に折れる。ここが肝心の関所であった訳……道中センダイムシクイはチョチョビーと鳴き郭公はカッコウだという私の固定観念に新風を吹き込まれた。これは大きな収穫に思う。やがて青空が開けた所に出るや草原の小鳥たちの大合唱。目前にウトナイ湖が見え、みずうみを渡る爽やかな風が心にくい。「シマアオジが入りましたよ」。三脚に設えたどのレンズもしっかり捉えて初心者に観せて下さる。濃黄の胸に金茶の首環、黒いビロードのマスク、と自然がおりなす配色の妙趣に目をうばわれる。「あっベニマシコ」一瞬青空に小さな紅色が翻った。コヨシキリが歌うなか草の絨毯に腰掛けての昼食は実に心地よい。

今回の指導員の一人山田良三氏は、正月の沖縄探鳥ツアーのメンバーで偶然の再会に話がはずんだ。原稿も依頼されてしまった。

間もなく数々の強烈な印象を与えてくれた植苗とも別れの時間がやってきた。現地で解散、後髪を引かれる想いで殿りを行く。湖の視界の最後に数人がヨシガモを見た。幸運児はヨシガモの見送りを受け、離れがたい。

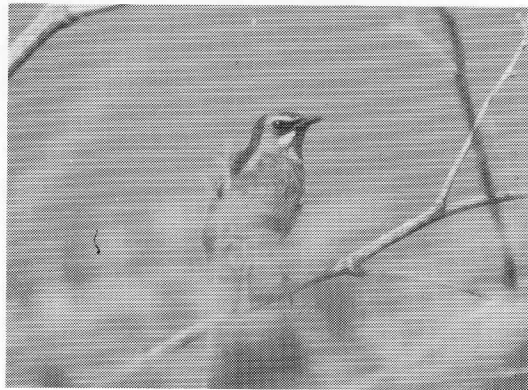
それにもまして、出遇いの不思議な一冊の本との巡り合いに、しみじみ考えさせられる一日だった。

〒063 札幌市西区八軒1条西4丁目1-17-55
9:10~11:50

〔記録された鳥〕アオサギ、マガモ、トビ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、ヤブサメ、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、シジュウカラ、ホオジロ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、コブハクチョウ 以上35種

〔参加者〕西 諭・早百合、澁谷信六・弘子、榊川保・弘子、今野弘、中矢道恵・麻紀、羽田恭子、松井昌、清水朋子、豊口肇・美代子、関口健一、新田キノ、佐々木武己、香川稔、田中金作・礼子、丸山薫、佐々木友子、千葉広、犬飼弘、鈴木とよ子、大野信明、松本修子、志田博明・政子、山田良造、井上公雄、富川徹、戸津高保・以知子、森岡弘光、遠藤茂・幸子、佐藤勇、福岡研也・玲子・正樹、岸塚洋美・麻季代、宮田久・あき子、鈴木克司、杉野仁美、柳沢信雄・千代子、竹内太刀夫・淳子、泉勝統、三船幸子、竹内強、鎌田玲子、大西典子、野口正男・キヨ、武沢和義・佐知子、田村允郁、山本由貴子、渡辺照彦 以上63名

〔担当幹事〕富川徹、山田良造



ノゴマ

東米里探鳥会

1. 6. 18 古川 豊子

札幌に住い乍ら、東米里の場所を知らず、何か遠い所の様に思っていました。街の中心から北東へバスでわずかに20分、まだ草が残る野鳥の楽園です。

当日は、生憎の曇り空、時折小雨がぱらつく天候となりましたが、「かっこう」の声が一行を楽しく迎えてくれました。これ迄は、ベランダと森林のウォッチングでしたので、草原での鳥をとらえるのは、さえぎる大木もなく、さぞ見やすいのだらうと、思っていました。意に反して難かしく慣れる迄には、時間がかかりました。

最初に出会ったカッコウに続き、アオサギが空高く優雅に飛んでいます。早く近くで野鳥の姿をとらえたいと、気も高ぶります。車道をはさんで両側の草地には、繁殖期、子育ての鳥達の囀りが、あちこちから聞こえて来ます。草地を進みますと、アカハラが胸からお腹にかけて、美しいキツネ色で囀っている姿を、望遠鏡がとらえました。双眼鏡よりはるかに威力があって、特徴をつかみやすいので、もっぱら望遠鏡を頼りにする事にしました。

遠くの枯木の頂上に鳥らしき姿、又望遠鏡が、オオジシギと確認。少しカーブした嘴、時折片足になったり、上空を旋回し羽音をたて乍らの急降下、本当に賑やかな鳥です。

ノビタキ・オオジュリンの♂達は、神様が創った配色の美しさを誇示するかの様に、ダンディーな姿で囀ります。一番感激したのは、ノビタキの親子、枯草の長く伸びた枝の中程に凶鑑そっくりのスタイルで一生懸命囀っているのです。幼鳥はようやく枝に掴り、まだうぶ毛が残っている姿の愛らしい事、すっかり鳥の世界に吸い込まれてしまいました。

近くでモズの警戒らしき鳴き声、カッコウが託卵でも

しようとしているのでしょうか。どうやらモズが追いはらった様でホット致しました。

道路から直ぐ近くの藪に、ノビタキの巣が見付かり、触れない様にとの注意を受け乍らの観察、何か悪い事でもした様な気持ちになり乍ら、そうーと見せて貰いました。此の草地も造成が進んでいる様で、来年は此の一部分は埋められるであろうとのお話し、今年楽しませてくれた鳥達は、来年どこで営巣し子育てするのでしょうか、気掛りな事です。

野生が人間と共存出来る自然環境を守ってやらなければ、此の素晴らしい地球は味気ないものになる事は、確実と思いました。沢山の鳥達を教えて下さった指導員の皆様、有りがとう御さいました。

〒064 札幌市中央区南2条西25丁目

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、コウライキジ、コチドリ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、アカモズ、モズ、ノビタキ、アカハラ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシブトガラス 以上28種

〔参加者〕中尾都、佐々木友子、関広司、霜村耕一、三船幸子、高橋典彦、井上公雄、新田キノ、山田良造、榊川保・弘子、松井昌、泉勝統、吉岡孝夫・真也、杉田範男、大野信明、佐藤勇、霜村耕介、佐々木武己、山田義隆・紀栄子、船尾恭子、竹内強、古川豊子、大沼裕・陽子、野坂英三、大平則雄、永島良郎・トキ江、千葉広 以上32名

〔担当幹事〕霜村耕一、井上公雄

夜の探鳥会

1. 6. 24 高橋 典彦

北海道野鳥愛護会主催の探鳥会行事という文字を新聞で見て、会の行事に参加4回目となります。福島県から札幌に来て3ヶ月経過しますが、道内の自然を深く見たいという希望を持っておりましたので、又とない会であると入会をし、できるだけ時間がとれるようにしてまいりました。福島でも1・2回は探鳥会なるものに参加し

てはみましたが本格的ではありませんでした。今までの知識で、野幌森林公園、米里周辺を探索させてもらいましたが、大変自分の生活範囲が広がった感じがしています。今回の『平和の滝公園周辺の夜の探鳥会』は、会の年間行事の中でも1回しかなく、大変興味を覚えての参加でした。ちょうど夏至を過ぎた時期ですので、集合時間の

18時30分でもまだまだ、双眼鏡が使える明るさでした。夜だからメモは取れないし、電気をつけても鳥は見えないと思って、何も持たず、歩けば暑くなるだろうと薄着をし、たかをくくっておりましたが、先輩会員皆さんの用意周到さには頭が下りました。なるほど、夜は夜でいろいろ準備が必要であると良い勉強になりました。うちわ(虫をよける)、虫よけスプレー、蚊取り線香、電灯、長そでの服と足首のしまるずぼんなど必携でした。

駐車場から約1時間ほど歩いた後、ここで待ちましょうといわれ、こんな見晴しの良い送電線の真下で止っていて何が見られ、聞かれるのだろうかと思っていました。

暗くなるにつれて聞きました。オットットー、オットットー(本などにはブッコッキョーと書いてありますが)澄んだ声が正面の森から響いてきました。コノハズクの声といわれて、中学生の頃ラジオから流れていた仏法僧という声を耳の奥から引き出されてなつかしく、ほんとうに感激しました。谷の向こうで2羽が合唱するように鳴いていました。もう今日はこれで満足と思ったとたん、同時にツツドリの声が聞こえたかと思うと、ヨタカが黒い影を作って飛び、キョキョキョ……とすぐそばで鳴き、ヤマシギが山の端に見えがくれに飛翔しているのも見られ、これでも今日は少ないということですが、演出

されたような場面でした。さあ帰りましょうといわれて我にかえりましたが、Yシャツの上から血を吸われた背中、手足のかゆさにはまいりましたが、大変有意義な時間でした。ちょっと新人の一言、鳥に限らず知識の豊富なのは良いのですが、歩きながらの声が大きいのが毎回気になります。"鳥を見、聞く時は木になれ、原点に帰って感激してみるのも奥行きが広がることにはならないでしょうか。

〒005 札幌市南区真駒内曙町三丁目10-2

〔記録された鳥〕ヤマシギ、キジバト、アオバト、ジュウイチ、ツツドリ、コノハズク、ヨタカ、ハリオアマツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、トラツグミ、ヤブサメ、エゾムシクイ、キビタキ、オオルリ、アオジ、カワラヒワ、カケス 以上18種

〔参加者〕鎌田玲子、武沢和義・佐知子、竹内 強、丸山薫・かおり、泉勝統、大西典子・尉仁、志田博明・政子、荒川真須美、羽田恭子、佐々木武己、山田甚一・れい子、矢野昭二・玲子、井上公雄、三船幸子、竹内太刀夫、戸津高保・以知子、高橋典彦、佐藤彰夫・末利子、大町欽子 以上27名

〔担当幹事〕戸津高保、井上公雄

〔ウトナイ湖〕

平成元年11月12日(日)

南下途中のハクチョウやカモ類、それにオオワシ・オジロワシなどをウォッチングしながら湖畔をネイチャーセンターまで歩きます。昨年はコウノトリを



この例会で見ることができました。

午前10時 ウトナイレイクホテル湖畔側集合
(行)千歳空港発 9:10 苫小牧行道南バス
ウトナイ遊園地下車

(帰)ウトナイ遊園地発 千歳行 13:24、14:14

〔小樽港〕平成元年12月10日(日)

野鳥の会・小樽支部との合同例会で、バスにのって祝津から小樽港内を移動しながらの観察です。シノリガモ・コオリガモなどの冬ガモと共に昨年は小樽港でオオハム、ウミスズメ、ウミガラスをごく間近で見ることができ

ました。今年はどうでしょうか。なお700円程の参加費が必要です。防寒には充分配慮して下さい。

午前10時 JR小樽駅待合室集合

〔藤の沢〕平成2年1月21日(日)

年に一度の室内からバードテーブルに集る野鳥を観察する例会です。小鳥の村の名誉村長である小沢さんをかこんで野鳥談義をしたり、昼には心づくしの豚汁を食べたりします。また楽しいゲームや福引もある予定です。気楽に御参加下さい。なお参加費は500円程です。

午前10時 白鳥園集合

定鉄バス 定山溪線 藤の沢下車 徒歩20分

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

平成元年11月5日(日)、12月3日(日)

午前9時 大沢口駐車場入口集合

いづれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

昼食・筆記具・観察用具・雨具等をご用意下さい。

探鳥会の問合せは 011(551)6321 井上まで。

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287

☎060 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465